



01 site —小樽 北運河周辺—

小樽は明治4年、札幌に北海道開拓使庁が置かれ、その海の門戸として商港を中心に発達した町であり、「小樽運河」はまちづくり団体の運河保存運動を契機に再生され、観光名所として有名である。

しかし観光客で賑わう「小樽運河」より北部の運河、通称北運河には、対照的な風景が広がっている。北運河はかつての40mの幅を持ち、漁船が係留されている。軟石倉庫も多く点在し、倉庫、事務所、工場、個人商店、住居が混在する地域である。

小樽は海側から山側に向かって円形状の地形にそって、海側から業務地、商業地、住宅地という構造をとっている。かつてはそれらを流動的につなぐ運河までの坂道が何本も通っていた。現在、対象地区は運河と住宅地の間に大きな幹線道路が走り、市民の生活と分断されてしまっている。

02 concept —水と緑を引き込む—

都市から取り残されたこの地域を、山側から海側までの要素を互いに引き込み、ランドスケープと建築によって周辺と緩やかに接続する。

豊かな環境、歴史的要素、都市的要素が多様に関係しあった新しい空間を生む。

その際の拠点として、北運河最北部の敷地において、職住商が混ざり合い、運河周辺の住民、山側に住む住民、ここで働く職人や市場で働く人達の接点を作り出す。

